
東方の短編とか B面

ハンヴィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方の短編とか B面

【Nコード】

N98450

【作者名】

ハンヴィー

【あらすじ】

東方の短編集です。

「ぼくのかんがえたおりじなるしゅじんこう」が東方キャラとイチヤネチヨする話です。

ヤンデレものですが、刺したり刺されたり、殺したり殺されたりとかいう、ヤンデレじゃなくてKITTY GUYだろそれは物的物はありません。たぶん。

自サイトに公開している短編と同じ内容です。

柊 1

「ただいま。良い子にしていたかい？」

帰宅した彼女は、剣と盾を壁に立て掛け、優しく微笑みながら言った。

短くああ、と返事をする、満足そうに頷き、俺の頭を優しく撫でまわした。

実年齢はともかく、見た目が少女である彼女に、大の男がそんな事をされるのは気恥ずかしい。

僅かに身動きすると、彼女は悪戯っぽく微笑み、俺の頭を胸に抱きかかえるようにして、いっそうくしゃくしゃと髪をかき乱した。

……華奢な体つきなのに、意外とある。

「私のいない間に、勝手に外に出たりしなかっただろうな？」

大きなイヤ耳を不安そうに伏せながら、彼女は俺の顔を覗き込んだ。

「この前みたいに、勝手に外に出ては駄目だぞ？ 外は凄く危険なんだからね」

「……出たくても、出られないよ、これじゃ」

俺は皮肉っぽく鼻を鳴らし、自分の首輪から伸びている鎖をじやりと揺らした。

犬のリードよろしく伸びた鎖は、屋内の柱に嚴重に巻き付けられ、打ち付けられた馬鹿デカイ釘でしっかりと固定されている。

人間の俺の力では外す事が出来ない。

彼女は、俺の皮肉などまるで気にも留めず、満足そうに頷いた。

もしかしたら、皮肉とすら受け取っていないのかもしれない。

「お腹が空いただろう？ 今御飯の用意をするからね」

幼子にでも話しかけるような優しい口調で言い、彼女は台所へと向かった。

ひよこひよここと楽しそうに揺れる彼女の尻尾を眺めつつ、今までの経緯をぼんやりと思い返してみる。

趣味の秘境駅巡りの最中、幻想郷と呼ばれるこの地に迷い込み、獣や良く分からない生き物（後で妖怪と知った）に追いかけ回され、肉体的にも精神的にもスタボロになっていた俺の前に彼女は現れた。白銀のような不思議な色合いの髪に、犬のような耳と尻尾、小さな身体に不釣り合いに大仰な剣と盾、どう見ても普通の人間には見えなかったが、それでもそれまでに遭遇してきたものに比べればかなりマシだったし、なにより必死だった。

今思うと、大の男が、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして縋りついて助けを求める様は、色々な意味で終っていたと思う。

そんな俺の様子に彼女は、始めこそ驚いていたが、事情を察したのか、すぐに保護してくれた。

そして、ここが幻想郷と呼ばれる外の世界から隔離された箱庭であること、俺の居る場所が、妖怪の山と呼ばれている場所であること、彼女自身が白狼天狗と言う妖怪である事も教えてくれた。

「人間はどうしようもなくひ弱で、うつかりするとすぐに死んでしまう貧弱な生き物だ。だから、これからは私がお前の面倒を見てやるよ」

かくして、俺は彼女に助けられたその日以来、彼女の家で養われることとなったのだが、家から一步も外に出してもらえなかった。外に出してほしいと頼んでも、危険だからの一点張りで、まとも

に取り合ってもらえない。

「人里って所に行ってみたいんだ」

幻想郷には、数は少ないものの、普通の人間も住んでいるらしい。この家の本棚にあった、幻想郷縁起という本でその事を知った俺は、彼女にそう頼み込んだ。

「とんでもない！ 平和な外の世界で育ったお前が、人里の凶暴な野良人間達の間で生きていけるわけがない！」

なんだよ、野良人間って。

「温室育ちのお前が、過酷な人里で生きていけるわけが無いんだ。私がずっと面倒見てやるから、大人しくしているんだ。いいね？」

……彼女の言動は、どうもおかしい。

当初は、親切心で言っているのだろうと思っていたけど、少し度が過ぎていく気がする。

そしてある日、俺は彼女が外出している隙を狙って、彼女の家から逃げ出した。

逃げ出したまでは良かったが、その先の事までは考えていなかった。

どこに行けばいいのかわからず、結局、妖怪の山の樹海で途方に暮れてしまった。

そうこうしているうちに日が暮れてしまい、またしても妖怪に襲われてしまったのだ。

馬鹿デカイ熊のような妖怪に散々追いかけ回され、もう駄目だと思った瞬間、はじめてこの幻想郷に来たときのように、彼女に助けられた。

俺と熊の間に割って入った彼女は、熊の鋭い爪を盾で受け流し、一気に懐に入り込むと、右手に握った大剣を片手で軽々と振るった。舞いでも踊る様な軽やかな動きで、瞬く間のうちに原型すら留めないほどに、熊を解体してしまったのだ。

「大丈夫か？ 怪我は無いか？ もう、勝手に外に出たら危ないって言っただろう？」

返り血と、それ以外のなんか赤黒いので全身を彩りながら、彼女は楽しそうにワラツタ。

「これで分かっただろう？ 家の外は、本当に危険でいっぱいなんだから」

満面の笑みを浮かべる彼女に、俺は間抜けに口を半開きにしたまま、カクカクと頷くしかなかった。

ちなみに、その日の夕飯は熊鍋でした。

熊さん、美味しかったです。

……そんなわけで。

勝手に外に出ないようにと、首輪と鎖を付けられる羽目になってしまったのだ。

「どう？ 美味しい？」

「うん。美味しいよ」

食事を摂る俺の様子を、彼女は頬杖を突きながら嬉しそうに眺めている。

用意された食事は、白米に味噌汁、彼女が山で採ってきた山菜の天ぷらと鮎の塩焼きという、中々豪華な献立だ。

監禁されてからのほうが、食生活が改善されているのがちょっと複雑だ。

「……こうやって、お前と過ごせる時間なんて、あっという間なんだよな……」

にこやかに微笑みながら、俺の食事を眺めていた彼女が、ふと寂しげな表情になってつぶやいた。

「どんなに大事に飼っても、人間のお前は、あっという間に、老いて死んでいくんだ……」

そうじゃないかとは思っていたけど、やっぱり俺はペット扱いだったらしい。

「そこで、私は考えたんだ。お前が死んでも、お前の生きた証を残す方法を」

「なんだよ、それ」

「お前に子供を作らせて、その子供に更に子供を作らせて……そうやって、お前の生きた証をずっと残す方法さ」

どこか熱に浮かされたような口調で、彼女は俺ににじり寄ってきた。

さり気なく距離を置こうとするが、身体が思うように動かない。

「最初は、人里から適当な人間の女でも攫ってきて、お前と番わせて子供を作らせようと考えた」

さらつと、とんでもない事を言いやがった。

「だけど、行為の最中に頭からバリバリと食べられてしまったら、目も当てられない」

あれか。人里の女つてのは、カマキリか何かなのか。

「だから、私がお前と番う事にしたんだ」

「なっ、なにを、言つて……んむっ!？」

物凄い力で畳の上に押し倒され、無理矢理唇を奪われた。

食事に一服盛られたのか、押し退けようにも指一本動かす事が出来ない。

もつとも、妖怪の彼女に力で抵抗する事なんて、端から不可能事ではあるが。

「可愛いお前の証をこの身に授かる。これが一番良い方法だと気づいたんだ」

彼女は、獣のような目で俺を見降ろし、荒い息を吐きながら、俺の衣服をはぎ取って行く。

「そして、子供が産まれたら、その子供と私が番い、更に子供をもつけるんだ」

俺の上で、苦痛と恍惚が絢交ぜになった表情で辛そうに動きながら、彼女は言った。

「そうやって、お前の生きた証をずっとずっとずっとずっと後世に繋げていくんだ。素晴らしい事だとは思わないか？」

素晴らしいかどうかは別として、女の子が産まれたらどうするんだ。

男の子が産まれるまで頑張るつもりなのか。

行為の最中、他人事のようにそんな事を考えていた。

「……さ、産休、ですって？」
「はい。これが、診断書です」

目を丸くする射命丸 文に、椛は永遠亭の薬師の直筆と思われる診断書を提出した。

「まだ2カ月なので、それほど目立っていませんが」

文は、ぽかんと間抜けに口を開けながら、手渡された診断書と、僅かに頬を赤らめ、幸せそうに腹部を撫でる椀の顔を交互に見つめた。

「いったい、いつの間に。」

幻想郷一の情報通を自認する自分が、部下にそういう関係の異性があり、しかも……

「文様？　なにか、書類に不備でも？」

「い、いいえ。受理したわ。大天狗様には、私の方から報告しておきます」

「ありがとうございます」

一礼して踵を返す部下の背中を、文は呆然と見送った。
扉の閉まる音に、ようやく我に返る。

「うつうつ……椀に……椀に先を越されたあ……」

一人残された文の慟哭が、室内にむなしく響いた。

椛2

「文様！ 私、いま流行りのヤンデレになってみようかと思うんです！！」

「……ごめんなさい、椛。もう一回言ってもらえるかしら？」

尻尾をブンブン振りながら、力強く宣言する椛に、私は眉間を揉み解しながら聞き返しました。

そんなもの、何時の間に流行ったのでしょうか。

幻想郷一の情報通を自認している私ですが、そんなものが流行っているなど、聞いた事ありません。

そもそも、ヤンデレなんてものは、なろうと思っただけのものではないでしょうに。

椛の話をよくよく聞いてみると、どうも、椛には懸想している相手がいるようでした。

恥ずかしそうに頬を染めながら、その相手への想いを語ってくれました。

どうやら、その相手と言うのは、最近幻想郷に迷い込み、人里で生活している外来人のようでした。

「私は、あの人を手に入れるため、ヤンデレしてみようかと思うのです！」

なぜ、そこでヤンデレが出てくるのか、私には理解が出来ませんでした。

出来ませんでした。あ、あの朴念仁を絵に描いたような椛が、一念発起したという事に驚きました。

ここはひとつ、適当に応援してあげる事にしましょう。

「そうなの。まあ、頑張つて」
「はいっ！　頑張りますっ！！」

桜は、無駄に元気よく返事をする、どこかに飛び去って行きま
した。

まあ、何かあれば、新聞のネタにでもさせてもらおう。
その時の私は、そんな軽い気持ちでした。

——そして、数日後。

「文様！　さっそく『すーきんぐ』っていうのをやってみまし
た！」

桜が嬉しそうに報告して来ました。

「能力を使つて、朝から晩まで、ずーっと見守ってみました！　お
はようからおやすみまで、暮らしを見つめる犬走です！」

そして、聞いてもいないのに、彼が何時に起床したとか、朝食は
何を食べたとか、彼の出す生ゴミの中の黄ばんだティッシュを思わ
ず持ち帰ってしまったとか、道端で女性と挨拶をしていて腹が立つ
たので、スペルカードで粉碎しようと思ったとか、仕事で上司に怒
られて落ち込んでいるのを見て、ムカついてその上司に弾幕をぶち
込みそうになったとか、一部、聞き捨てならない箇所がありました

が、そんな事を延々と語ってくれました。

「それは、まあ、なんとまあ……凄いわね」

一通り話を聞き終えた私の顔は、顔面神経痛にでもなったかのよう
うに、引き攣っていたと思います。

「その事を彼に話したら、とても驚いてました！」
「話したのかよ！」

思わず、文花帖でツツコミを入れてしまいました。
そんな事を馬鹿正直に話したら、ドン引きされるに決まっている
でしょうに。

何を考えているのでしょうか、このわんこは。

「驚いていたけど、私の頭を撫でてくれて、桜は良く見てるね、っ
て褒めてくれました！」

「えー！？」

ストーキングした事を本人に報告する桜もアレですが、件の彼氏
も相当アレのようです。

「ヤンデレって凄い効果ですね！ この調子で、どんどんヤンデレ
ることにします！」

「はあ、まあ。頑張ってね」

私はそう答えるのが精一杯でした。

——そして、さらに数日が経過しました。

「文様！ さつそく『らちかんきん』っていつのをやってみました！」

椀が嬉しそうに報告して来ました。

「彼が私以外のメスの目に触れないように、私の家に攫って閉じ込めちゃいました！」

ストーキング行為ならまだしも（？）拉致監禁とは……どう見ても犯罪行為ではないですか。

「……彼は嫌がったのではないの？」

「そんな事ありませんでした！ 私の頭を撫でながら、そこまで思ってくれるなんて、僕は幸せ者だって喜んでくれました！」

「えー！？」

……件の彼氏、中々の豪の者のようです。

「あ、そうそう！ 文様！ これを見てください！」

そう言っただけは、嬉しそうに、法衣の襟の部分を少し降ろして見せました。

襟の下から現れたのは、黒光りする革製の……

「く、くびわ……？」

「はい！」

呆然と呟く私に、柊は元気よく頷きました。

「……いつたい、どういう事？」

「それはですね……」

柊は幸せそうに頬を染めながら語り始めました。

柊と彼氏との間に、以下の様な会話があったそうです。

「……柊がそこまで思ってくれるのは嬉しい。だけど、僕も柊が他の男の目に触れるのは嫌だ」

「分かりました！ 私も、家から一步も出ずに、片時もあなたの傍から離れません！」

「いや、それは駄目だ！ 自由奔放で、太陽の様に明るい君を縛りつけるような真似をしたくない！」

「で、でも。それじゃあ、どうすれば……」

「だから、君にはいつもこれを身に付けて欲しい……君が、僕だけのものだという証の為に……！」

「わあ……素敵なお首輪です。ふふ、どうです？ 似合ってますか？」

「ああ、柊！ 素敵だよ、凄く良く似合ってる！」

「……… なんていうか、もう、好きにしろとしか言い様がありません。」

アレ同士、お似合いのカップルでは無いのでしょうか。

「ヤンデレって、本当に凄い効果ですね！ この調子で、どんどんヤンデレることにします！」

「はあ、まあ。程々に頑張ってね……」

私はそう答えるのが精一杯でした。

——そして、さらに数日が経過しました。

「文様！ ついに『きせいじじつ』っていつのを作りました！」

椀が嬉しそうに報告して来ました。

拉致監禁してる時点で、既成事実も何もあつたもんじゃないでしように。

「聞いて驚いて下さい！ ついに！ 一緒のお布団で寝ました！」

正直、今更かよと思いましたので、私はそうなの、と軽く聞き流しました。

「あーん、どうしましょう？ にんっしんっしちやいますう！」

自分自身を抱き締めるようにして、いやんいやんと身体をくねらせています。

すごく……ウザいです。

「子供の名前は何か良いでしょうか？ やっぱり、木偏の漢字が良いでしょうか？ 核とか机とか橋とか権とか……」

木偏なら何でも良いのかよ。

しかし、まあ。

あの椀が、ついに大人の階段を上った事については、素直に祝福してあげるべきかもしれません。

ですが、なんかイラッと来るので、新聞のネタにして、幻想郷中に大暴露してやることにしました。

「それで、その時の様子を教えてもらえるかしら？」

「はい！ あの人は、私を優しく抱きしめて、眠るまで頭をもふもふと撫でてくれました！」

「……それで？」

「え？ それだけですけど……？」

不思議そうに小首を傾げる椀に、私はがっくりと肩を落としました。

どうやら、一緒に寝たというのは、言葉通りの意味だったようです。

「ヤンデレって、本当に凄い効果ですね！ この調子で、どんどんヤンデレることにします！」

「はあ、まあ。頑張ってね……」

私はそう答えるのが精一杯でした。

はあ……私も彼氏が欲しいです。

やおい。

柩3

「既成事実を作るには、やはりお酒が一番ですね。ふふふ」

もうすぐあの人がやって来る時間です。

私は、ささやかな酒宴の支度をしながら、この後の展開を軽くシミュレートしてみました。

引き裂かれた衣服で身体を隠し、顔を伏せて身体を震わせ、しゃくりをあげる私。

今の私達は、裸同然の格好。

布団のシーツに残る赤いシミが、この場で何が行われたのかを如実に物語っている。

「な、なん……こ、これ、は……？」

状況が飲み込めず、オロオロとするあの人。

「ひつく、ぐすつ、信じて……いたのにっ……お酒の勢いでっ……こんな、こんなっ……！」

私はノロノロと顔を上げ、上目づかいに、人形のような虚ろな目（確か、れいぼう目と言ったっけ）であの人の顔を見つめる。

自分のしでかした事に愕然となり、顔を真っ青にするあの人。酒の勢いで、取り返しのつかない事をしてしまったのだ。

「信じて、いたのに……！！　う、うあ、うあああああああっ」

絞り出すような私の慟哭に、あの方は真っ青な顔で息を飲む。

「う、ごめんっ！！ 一生、一生大事にするから……！！」

私の身体を背後からしっかりと抱き締め、責任感の強いあの人はそう宣言する。

状況から考えても、そうせざるをえない。

なにしろ、酒の勢いで女性の純潔を散らしてしまうという、最低の行為を行ってしまったのだから。

「……完璧。完璧です！」

一緒にお酒を飲む↓あの人酔い潰れる↓服を脱がす↓私も服を脱ぐ↓一緒にお布団に入る↓食紅かなんかで、シーツにシミを付ける↓責任とって下さいね。

ああ、何て素晴らしい黄金コンボなのでしょう！

あまりの完全犯罪ぶりに、自分の才能が空恐ろしく思えてきます。何をしても、どんな手段を使っても、既成事実さえ作ってしまえば、こちらのもの。

大丈夫。私の作戦は完璧よ。きつとうまくいく。

「頑張れ、私！ はいっ、頑張ります！」

自分自身に発破を掛け、私は最後の支度に取りかかりました。

「椀と二人だけで飲むのなんて、初めてじゃないかな？」

盃に口を付けながら、あの人は朗らかに笑っています。

ふふふ……そうやって、呑気に笑っていられるのも今の内です。
人生の墓場が、もうすぐそこまで迫っていますよ。

しかも、今日は大当たりの日です。

逃げ場はありません。
子供の名前は何にしようかなあ……

「……椀？ 顔が赤いみたいだけど、大丈夫？」

はっと気がつく、彼が心配そうに私の顔を覗き込んでいました。
息がかかるほどの間近だったので、ちよつとドキツとしました。

「ご、ごめんなさい……ちよつと、酔ったみたいです……」

そんな事を言いながら、私は彼にしな垂れかかります。

私の身体の感触にどきりとしたように、私の肩を支えました。

「珍しいね。天狗の椀が、僕よりも先に酔うなんて」

あ、あれ……

確かに、何だか、おかしい、です……

演技のつもりだった筈なのに、何だか、身体に、力が……

天狗である私が、人間である彼よりも、先に酔いが回るなんて、
そんなこと……

「椀？ 大丈夫？ ちよつと効きすぎたかな……」

彼が何か言っていますが、靄がかかったように頭がぼんやりと
して、はつきりと理解出来ませんでした。

そうこうしているうちに、ふわりと身体が浮き上がるような感覚
がありました。

どうやら、お姫様だつこで抱きかかえられているようです。
こんな状況にもかかわらず、私は胸が高鳴りました。

「さあ、暫く横になって。後片付けは僕がやっておくから」
「は、はい、すいま、せ……」

優しく頭を撫でる彼の手の感触に、なんとも言えない心地良さを
感じながら、私は眠りに落ちて行きました。

「ん……」

深いまどろみから目が覚めると、あたりはすっかり明るくなって
いました。

窓の外からは、鳥の囀りが聞こえます。

寝起きのぼんやりとした頭で昨夜の事を思い返し、慌てて飛び起
きました。

何てこと。

まさか、この私が彼よりも先に酔い潰れて、眠ってしまうなんて
せつかくの計画が台無しです。

「ひっ、うっ、ぐすっ……」

しゃくりを上げるような鳴咽に、私は視線を隣に転じました。
そこには彼が居ました。

ボロボロの衣服で身体を隠し、人形の様な虚ろな目で私の方を見
つめています。

「ぐすっ……ひどいよっ、椀……こんな、こんなこと、するなんて……信じて、信じていたのに……!!」

「え、え、え……?」

私はすっかり混乱してしまい、呆けたようにポカンと口を開けてしまいます。

「お酒の勢いで、乱暴するなんて……。っ。最低だよっ……」

……まさか。

ま、まさか、まさか……!!

そ、そういえば、さっきから股間に妙な痛みを感じます。

それに、シーツの紅いシミ……

食紅なんかとは明らかに違う、時間が経過してどす黒く変色したこれは、紛れもなく……

こ、こんな、こんなことって……

「じ、じ、じ、ごめんなさいっ!!」

私は正座をすると、深々と頭を下げました。

「謝って済む問題じゃないよ……」

低く威圧的な声に、私はびくびくしながら顔を上げました。いったい、どうすれば赦してもらえるのでしょうか。

「僕の初めてを奪ったんだから、ちゃんと、責任とってよ……?」

「は、はいっ! もちろんです! 一生大事にしますっ!」

背筋を伸ばして宣言すると、彼はようやく、ほんの少し笑顔を見

せてくれました。

ああ、何てことでしょう。

まさかの逆パターンになってしまうとは、とんだ計算違いです。

……でも、まあ、結果オーライです。

ちよつと過程に問題がありましたか、良しとしましょう。

こうして、計画に多少の齟齬が生じましたが、私は彼とめでたく結ばれる事が出来ました。

.....計画通り。

映姫様 1

朝目が覚めると、首輪が付いていた。

首輪にはぶつとい鎖が付いており、その先はニコニコと微笑む映姫様の手の中に伸びていた。

「……映姫様、これは？」

「貴方は悪行を積み過ぎている。このままでは確実に地獄に落ちます」

「はあ」

それとこの首輪と、一体何の関係があるんだろうか。

「これからは、一切の悪行が積めないよう、私がしっかりと見守ってあげます。その為の措置です」

「えーと。トイレや風呂はどうするんですか」

「もちろん、しっかりと見守ります」

「キヤー、セクハラー」

「破廉恥な事を言わない！」

手に持った卒塔婆みたいなお仕置き棒でぺちんと頭を叩かれた。

「私の言う事に決して逆らわず、言われたとおりに行動する。それが、貴方に積める善行です」

「具体的には…？」

「まず、私以外の女性と会話をしてはなりません。見てもいけません。私から1メートル以上離れてはいけません。それから…」

そんな感じで禁則事項をつらつらと読み上げる映姫様。

10個目までは数えたが、途中で諦めた。

「……とまあ、これはあくまで、一例です」
「一例!？」

絶句する俺に向かって、映姫様は微笑んで見せた。

「心配いりません。私の言うとおりにしていれば、それで良いのです」

「……しなかつたら？」

映姫様は無言で卒塔婆を振るった。

口元に笑みが浮かんでいるが、目が全く笑っていない。

「きゃん! きゃん! いたい! 映姫様!！」

「こ、小町の口真似をするんじゃない! 有罪! 有罪!」

「あだだだ! ご、ごめんなさい!!」

「まったく……」

「と、ところで、映姫様」

頭を擦りつつ、俺は映姫様に尋ねた。

「さつき、『1メートル以上離れてはいけない』って言ってたけど、風呂やトイレも一緒ってことですよ?」

「……」

「それって、つまり。フヒヒヒ……」

「有罪! 有罪! 有罪!」

「あだだだ!!! ごめんなさい、ごめんなさい!！」

なんか、妙な趣味に目覚めてしまいそうです。

永遠亭1

襖の閉まる僅かな物音で目が覚めた。

視線を隣の布団に移すと、そこで眠っているはずの鈴仙の姿が無かった。

厠にでも行つたのだろーと思ひ、寝なおそうと目を閉じる。

しかし、妙な胸騒ぎを覚え、なかなか寝付く事が出来ない。

言い知れぬ不安に駆られ、俺は鈴仙を探すため布団を抜け出した。

「まったく……これじゃ、ガキの頃と変わらないな……」

月明かりに照らされた永遠亭の渡り廊下を歩きながら、俺は苦笑気味に呟いた。

子供の頃の事は良く覚えていないが、俺は外来人の捨て子だったらしい。

迷いの竹林に放置されていたところを、ここ永遠亭に保護され、この歳になるまで育てられた。

唯の人間でしかない俺を受け入れてくれた永遠亭の住民は皆、俺にとつてかけがえのない家族だ。

中でも鈴仙は俺を育ててくれた母親であり、今では大切な恋人でもあるのだ。

幼い頃の俺はかなりの甘えん坊で、今回のように、夜中に鈴仙が傍にいないせいで、永遠亭中に響き渡る大音量で泣き喚き、大騒ぎになった事があつたらしい。

今でも、たまにその事で鈴仙にからかわれる事があるが、俺にとつては触れて欲しくない黒歴史だ。

第一、その時の事なんて覚えていない。

暫く廊下を歩いていると、襖の隙間から明りが洩れている部屋を

見つけた。

中から微かに話し声が聞こえる。

なんとなく物音をたててはいけない気がした俺は、忍び足で静かに部屋を覗き込んだ。

そこに、鈴仙はいた。

鈴仙だけではなく、姫様に鈴仙の師である永琳先生、それにてゐまで。

「イナバ、分かっているわね」

「はい、姫様。今日であの子も21歳……あれから20年が経ちました」

「待ちかねたよ。とうとう私の番だね。60年がこんなに長いとはねえ」

「あらあら、てゐたら……」

いったい、こんな夜更けに何をやっているのだろうか。

盗み聞きをしているという罪悪感を感じながらも、俺はその場を動く事が出来なかった。

「永琳、薬は出来ているわね？」

「ええ、もちろん」

先生は姫様の問いに薄らと微笑み、注射のアンプルを取りだした。

「これを使えば、すぐにでも」

なんだ……

いったい、先生は何を言っているんだ……？

聞き耳を立てる事に夢中になり、俺はあまりにも間抜けなミスを犯した。

襖の立てるカタン、という音に、室内の4人の顔が一斉に俺の方を向いた。

8つの瞳に一斉に注視され、俺は凍りついた。

鈴仙がゆっくりとこちらに歩み寄り、襖を開け放った。

「……聞いていたのね」

必死に何か言い訳を口にしようとするが、頭が回らない。

釣りあげられた魚のように、間抜けに口をパクパクさせてしまう。

鈴仙も他の3人も、そんな俺を咎めるでもなく、まるで聖母のような、慈愛に満ちていると言っても良い優しい笑みで見つめている。

それなのに。

それなのに、背筋を伝う冷や汗と身体の震えが止まらない。

「今日から、てゐがあなたの母親になるわ。そして、恋人に」

そんな俺に、鈴仙は優しく諭すように言った。

「ど、どういう……こと？」

絞り出すようにそう言うのがやっとだった。

てゐが俺の母親？ 恋人？ いったい、何を言っているんだ。

そして、鈴仙の口から語られた真相に俺は愕然とした。

俺は確かに外来人の捨て子だった。

しかし、拾われたのは今から数百年も前の事。

ただの人間でしかないはずの俺が、数百年もの歳月を生きていられるはずが無い。

俺は、21歳になるまで育てられた後、永琳先生の若返りの薬で赤ん坊に戻され、そこから21になるまで育てられ、また赤ん坊に戻されるという事を数百年の間、延々と繰り返されて来たというの

だ。

「な、なんで……？」

「それはね。私達4人が、あなたを愛してしまったから。私達はあなたに、家族としての愛情以上の感情を抱いてしまったの」

「でも、誰か一人があなたを独占しようとするれば、これまでの私達の関係が壊れてしまう。ひいては、永遠亭が壊れてしまう」

「そう。そして、4人で協議した結果……」

「順番に20年間だけあなたを独占して愛でる事にしたの。そして、今度は私の番」

鈴仙の言葉を永琳先生と姫様が引き継ぎ、てゐが満面の笑みで付け足した。

眩暈と込み上げる吐き気のため立っている事が出来ず、俺はその場にへたり込んだ。

俺は、数百年間の間、彼女達の玩具にされていたのだ。

悠久の時を生きる彼女達の、格好の暇潰しの道具。

そんな俺を、4人はまったく同じ笑みを浮かべながら見つめている。

「私達はあなたを心から愛しているの。ただそれだけなの。みんなで平等に、ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと、あなたを愛していただけなの」

熱っぽく語る鈴仙の赤い瞳には、明らかな狂気の色が見て取れた。鈴仙だけでは無い。

姫様も永琳先生もてるも。

何かを盲目的に信仰し、それ以外の一切を否定し拒絶する狂信的な光が。

「さあ……」

「う、うわああああああっ！！！！」

俺は、渾身の力を込めて鈴仙を突き飛ばした。

尻もちをついて呆然とする鈴仙に多少の罪悪感を感じながらも、俺は踵を返して走り出した。

一刻も早く、この屋敷から逃げ出さなければ。

逃げ出した後の事は、それから考えれば良い。

ここで彼女らの玩具になるくらいだったら、野たれ死ぬか妖怪に食われるほうがマシだ。

まるで迷路のようなこの屋敷も、物心ついたところから暮らしているせいか、どこに何があるのかは分かっていた。

やがて、いくつかの角を曲がり、永遠亭の玄関に辿り着いた。

靴も履かずに玄関の引き戸を開き、鉄砲玉のような勢いで飛び出す。

「おかえりなさい」

鈴仙の声に俺は愕然とした。

玄関だと思って開いたその先は、先ほどの部屋だったのだ。

焦るあまり、俺は、彼女の能力を完全に失念していた。

俺は、その場にへたり込み、呆けたように、注射器を手に取り歩み寄ってくる永琳先生を見上げていた。

「ふふふ。可愛い」

てゐは嬉しそうに赤子を抱き上げ、愛おしそうに頬ずりをした。

「おかえり。また20年間よろしくね。あは、頬つぺたプニプニして可愛い」。60年前みたいに、私好みに育ててあげるからねえ」

キャツキャウフフとはしゃぐてゐを、鈴仙は複雑な表情で見つめる。

「イナバ。そんな顔をしないの」

「そうよ、ウドンゲ。てゐだって60年我慢したのよ」

「分かっています。姫様、師匠……」

鈴仙は堪えるように、下唇をキュツと噛んだ。

「てゐの次は私の番ね。たった20年がこんなに待ち遠しいなんて」

「良いじゃないの永琳。おかげで人生に張りが出来たのだから」

「フフ……確かにそうですね」

永琳は苦笑しつつ首肯した。

「これからもずっとずっと、永遠にあの子は私達4人のモノ」

「ええ。だからウドンゲもそんな顔するのはお止しなさい。気持ち分かるけど」

「……はい」

鈴仙は、てゐの腕に抱かれ眠る、それまで息子であり恋人であった赤子を見つめる。

出来る事なら、今すぐにでも、てゐからを奪い取ってしまいたい。こんな衝動に駆られたのは、今までも一度や二度ではない。しかし、そんな一時の激情に身を任せるほど、鈴仙は愚かでは無かった。

（60年……60年の辛抱よ……）

内心でそう呟きながら、鈴仙はてゐと赤子から目を背けた。

60年待てばいいのだ。

そうすれば、まっさらな状態で、再び自分の元に戻ってくる。今までだって出来た事だ。

ほんの少しだけ、辛抱すれば良い。

妖怪である自分にとって、60年などあつという間だ。

鈴仙は、心の中で必死に自分に言い聞かせ、静かにその場を後にした。

ヤンデレ。新聞1

みなさん、こんにちは。

清く正しい幻想郷最速のブン屋、射命丸 文です。

ここ数年、幻想郷では、空前のベビーブームが巻き起こっています。

外の世界同様、出生率の低下が深刻な問題となっているこの幻想郷にとって、それは僥倖と言っても良いでしょう。

私の友人知人も軒並み伴侶との間に子をもっており、かく言う私も、愛しい旦那様との愛の結晶が、お腹に宿っています。

おそらく、今回の一連の記事を書き終えたら、産休を取るようになるでしょう。

まあ、それはさておくとして。

まず、最初の取材は、私や他の面子に先駆けて、人里に住む外人の彼氏とデキ婚キメやがった私の元部下——犬走 椛からです。

「こんにちは、椛」

「こんにちは。いらっしやいませ、文様」

微笑みながら挨拶を返す椛は、以前と比べてずいぶん印象が変わって見えます。

以前までは、謹厳実直・歩武堂々といった感じの、ちょっと融通の利かない真面目一徹の元気な少年兵というイメージが強かったのですが、短かった髪は肩まで伸ばしており、身体つきも丸みを帯びて、全体的に柔らかな雰囲気醸し出しています。

やはり、母親になったからなのでしょうが。

「いやはや、それにしても。ほんの数年でよく8人も産んだものね」「これも、旦那様の愛のなせるわざです」

栳は幸せそうに柔和な微笑を浮かべ、そつと自分の腹部を撫でます。

大きく膨らんだそのお腹には、驚いたことに、9人目が宿っているのです。

いくらなんでも、頑張り過ぎです。

件の旦那さんかというと、栳の隣で、5歳を最年長とした8人の量産型栳に「とーさま、とーさま」「ぱぱー、ぱぱー」とばかりにもみもみもみくちやにされてボーっとしています。

量産型の中には、幾人か、髪の色と尻尾の色が黒の子が混じっています。お父さんの血の影響でしょう。

それにしても、旦那さんの様子がちよつと変です。

ボーっと空を見上げたまま、たまに「あー」とか「うー」とか声を出すだけで、私のほうを見ようとしません。

「5年前の最初の出産で三つ子が生まれ、その二年後に更に三つ子が生まれ、その一年後に双子が生まれ……そして、今お腹にいる子で9人目です」

「すさまじい生産力ね……」

私はひたすら感心しました。

おっと。のんびり世間話をしている場合ではありませんでした。

「さて、それでは取材に入らせてもらうわ。栳さんは、愛しい旦那様をどうやってモノにしたのでしょうか？」

「薬を使いました。天狗謹製の媚薬です。それで既成事実を作りました」

「なるほど」

薬を使うというのは、手段としてはオーソドックスですが、相手

が唯の人間であれば、かなりの効果を期待することができます。
いかにも椀らしい、堅実なやり方です。

「でも、人間と天狗の間に、本当に子供ができるのかという不安がありました。だから、とにかく数をこなそうと、かなりの量の媚薬を、何度も何度も投与してしまったんです」

「ふむふむ」

さらさらと文花帖にペンを走らせながら、視線で先を促します。

「その結果、旦那様は自分ではどうすることも出来ない性衝動で、暴走することが多くなりました」

「あやや。それは一大事ですな」

「永遠亭で処方してもらった、安定剤を投与すれば、一時的には収まるのですが、すっかり投与を忘れてしまうと、あっという間に、その……」

椀は恥らうように頬を染め、大きなお腹を撫で回しました。

つまり、子沢山の原因はそこにあるというわけですね。

「それともう一つの問題は、安定剤の副作用の影響で、旦那様の精神がちよつと壊れちゃったことでしょうか」

椀は少し心配そうに、量産型のジャングルジムと化している旦那さんに目を向けました。

相変わらず、旦那さんは「あー」とか「うー」とか言っています。

「それはまた大変ですね」

「ええ、でも、良いんです……私しか、見えなくなっていますから」

椛は焦点の定まらないうつろな目で、嬉しそうに微笑みました。
旦那さんへの深い愛情が感じられる、素敵に壊れた笑顔です。
その後、旦那さんとの馴れ初めや、結婚するまでのエピソードを
いくつか聞き、取材を終りました。

「ご協力ありがとうございました、椛さん」

「いえいえ。こんなことでよければいつでも……ところで、文様」
「何かしら？」

取材モードから通常モードに切り替え、私は言いました。

「文様は、どうやって、旦那さんをモノにしたんですか？」

椛の質問に、私は困ってしまいました。

別に話すのが嫌なわけではなく、焦るあまり、あまりにも直接的
で、芸の無い手段を取ってしまったからです。

「聞いても面白いことじゃないわよ」

「それでも良いです。聞かせてください」

「仕方ないわね……」

私は苦笑しつつ、椛に教えてあげました。

私の取った手段は、あまりにもベタなやり方でした。

妖怪と人間の力の差に物を言わせ、無理矢理奪わせてもらったの
です。

泣き叫んで抵抗する旦那様が、押し寄せる快感に抗しきれず次第
に恍惚となり、やがて諦観とともに、私の愛を素直に受け入れるま
での様子はなかなか見ものでした。

今では、従順に私の愛を享受してくれるようになり、お腹の子に
障るから、仕事を休んで安静にするようにと心配までしてくれます。

「文様、愛されているんですね」

「何を言ってるの。椀だって同じでしょう？」

「あー……」

「ほらほら。愛しの旦那様もそう言っているわよ」

「ふふ……ありがとうございます、旦那様」

「うー……」

私と椀は顔を見合わせ、微笑を浮かべました。

お互いの瞳に映る、壊れた笑みを浮かべる自分自身の姿に、堪らなく気分が高揚しました。

ヤンデレ。新聞2

みなさん、こんにちは。

清く正しい幻想郷最速のブン屋、射命丸 文です。

お陰さまで、前回の記事は好評でした。

そんなわけで、今回も幻想郷の程良くイカれた人妖夫婦の取材を行いたいと思います。

「こんにちは、慧音さん」

「ああ、射命丸か。良く来たな」

今回の取材相手は、人里の守護者こと、上白沢 慧音さんご夫妻です。

慧音さんは臨月が近いらしく、大きなお腹が少し大変そうでした。そんな慧音さんの身体を、旦那さんが優しく支えています。何とも仲睦まじい夫婦です。

まあ、私と旦那様ほどではありませんが。ふふん。

「旦那さんもこんにちは。直接お会いするのは久しぶりかもしれませんね」

慧音さんの旦那さんは、以前は宴会などでよく顔を合わせていたのですが、慧音さんとお付き合いを始めた頃から、ぱったりと見掛けなくなっていました。

私が挨拶すると、旦那さんは困ったように曖昧な笑みを浮かべました。

「こんにちは。ええと、はじめまして……？」

「あやや。何を言っているんですか。私の顔を忘れちゃったんです

か？」

「ああ、射命丸。うちの旦那は、私以外の女の事は知らない事になっ
っているんだよ」

「あややや？ それはどういうことでしょうか」

私はすぐさま文花帖と万年筆を取り出し、慧音さんに詰めよりま
す。

慧音さんは苦笑を浮かべつつ、その理由を話してくれました。

「私が、旦那が他の女と出会った歴史を無かった事になっているだけ
だ」

さらっと物凄い事を言いました。

どうやら、『歴史を隠す程度の能力』で、旦那さんの歴史を弄っ
ているようです。

「なるほど。お得意の歴史を捏造する程度の能力をフル活用してい
るわけですね」

「人聞きの悪い。私は、どこぞの半島人か」

やってることは大して変わらない気がします。

むしろ、口先で妄言を喚き散らすだけなぶん、どこぞの半島人の
方がまだマシのような気がします。

「だって、この人は私の夫なんだぞ？ 私以外の女を知っている必
要がどこにあるの！？」

「あやや！？ 近い、近いですよ、慧音さん！」

いきなり至近距離に顔を寄せられ、私は大いにうろたえました。
慧音さんの瞳は、狂気と偏執的な愛情に囚われ、良い感じにギラ

ついでにしました。

「ふふ。だけど、それだけじゃない。『歴史を創る程度の能力』で、既成事実もしっかり作ってたしな」

「やっぱり捏造じゃないですかー!!」

私の突っ込みに構わず、慧音さんは、熱っぽく今に至る経緯を詳細に語ってくれました。

「まずは、下準備からだった。里の歴史を弄って、私とこの人が結婚まで秒読み段階の恋人同士という歴史を創ったんだ」

「ふむふむ」

「あまり派手にやると、博麗の巫女や隙間妖怪が黙っていないからな。中々に苦労した」

「ほうほう」

「教育者や里の守護者と言う立場を利用して、里の子供達やその父兄を使い、私とこの人の仲を、里中に伝播させることも忘れなかった」

「思想洗脳ですね、わかります」

自身の立場を利用して搦手で攻めるとは、知性派の慧音さんらしい手口です。

そうやって、時間を掛けてじっくりと外堀を埋めて行ったわけですか。

「後は簡単さ。もし、私を拒んだりすれば、村八分になるのだからな。ふふ」

「あやや、悪い人ですね」

この幻想郷で、普通の人間が安全に暮らせる場所は、ごくごく限

られています。

人里で村八分になどなってしまったら、生きて行くのはかなり難しいでしょう。

ましてや、相手は人里の守護者である慧音さんです。

人間達が、慧音さんの言葉を疑う訳はありません。

彼に残された道は、最初から一つしか無かったのです。

「今回も、中々興味深いお話が聞けました。ところで、慧音さん」
「なんだ？」

「この後、旦那さんの歴史から、私の存在を無かった事にしちゃうんですか」

「無論だ」

慧音さんは、当然だとばかりに力強く頷きました。

隣の旦那さんは、そんな慧音さんを複雑な表情で見つめていました。

しかし私は、旦那さんの瞳の奥に、慧音さんに所有される事に対してのほの暗い喜びが見てとれたのを、見逃しませんでした。

私の愛しい旦那様と同じ種類の、諦観と葛藤、そして愛情の入り混じったキレイな目でした。

「あ、そうそう。最後に一つだけ質問です」

「なんだ？」

「お腹の子が女の子だった場合、どうするんです？　旦那さんから、その子の歴史を無かった事にするんですか？」

「おいおい、射命丸……」

慧音さんは手を振って苦笑しました。

「いくら私以外の女でも、娘の存在を父親から隠すわけにはいかな

いだろう?」

「やっぱりそうですね」

「その時は、娘と二人で楽しむことにするだけさ」

「……………え?」

絶句する私を余所に、慧音さんは愛おしそうにお腹を一撫でしました。

後日談となりますが、私の取材を終えた数日後、慧音さんは無事に女の赤ちゃんを出産したとのことでした。

ヤンデレ。新聞3

みなさん、こんにちは。

清く正しい幻想郷最速のブン屋、射命丸 文です。

最近、暑い日が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか。暑かろうが寒かろうが、みなさんは常に伴侶との暑い一時を過ごしているかと思いますが、この季節、励み過ぎでの熱中症には十分お気を付け下さい。

特に、伴侶が人間の方は十分ご注意を。

殿方にとって服上死は男の本懐かもしれませんが、こちらとしては、子も授からずに伴侶に先立たれてしまつては本末転倒ですからね。

さてさて。今回のステキ夫婦は、人間同士の、しかも外来人同士のご夫婦です。

山ごと幻想郷にやって来て、何時の間にやら妖怪の山にデカイ面をして居座りやがった二柱を祀る、守矢神社の風祝さん——念願の自機昇格も果たし、もう2Pカラーなんて言わせないぜ！ ヒヤッハー！！ な感じで程良く弾け気味の東風谷 早苗さんご夫妻です。今回は同じ人間同士、しかも外来人同士とのことなので、わりとソフトな記事になるかもしれません。

「こんにちは、早苗さん」

「いらつしやいませ、文さん。お待ちしておりました」

ニコニコと微笑んでいる早苗さんのお腹は、桜や慧音さんと同じく、大きく膨らんでおり、彼女もまた、胎内に愛しい伴侶との愛の結晶を宿しているようです。

「では、早速取材に入らせていただこうかと思うのですが……えー

と」

「どうしました？」

早苗さんは、きょとんとした表情で、可愛らしく小首をかしげました。

「旦那さんの姿が見えないようなんですが……？」

「旦那様なら、こちらです」

そう言って、早苗さんは自分のお腹を愛おしそうに撫でまわしました。

そして、まるでそれに答えるかのように、早苗さんのお腹がぼこんと鳴りました。

私は意味が分からず、呆けたようにはあ？ と聞き返してしまいました。

「ですから、旦那様は、私の中に居るんです」

「え、えーっと……」

あやや。仰っている意味が分かりません。

一体どういうことなのでしょう。

混乱する私の様子がおかしかったのか、早苗さんは笑みをいつそう深いものにしました。

な、なんでしょう……こう、背筋がうすら寒くなるような微笑みです。

「ねえ、文さん。私はなんでしょう？」

「い、いや、そんな、いきなり哲学的な事を聞かれまして……」

「くす。そういう意味ではありませんよ。私は守矢の風祝にして現人神です」

「そ、それは、存じていますが……」

「いずれ、人から神に成る存在です……でも」

早苗さんは顔を伏せ、どこか物悲しい表情でお腹を擦りました。

「旦那様は、違います……人としての生を終えれば、彼岸に渡り、何処とも知れぬ場所に転生し、私と離れ離れになってしまいます」

「まあ、そうですね」

「そんな事、認められる訳がありません！」

突然の大声に、私は思わずびくりと身体を緊張させました。

「ふふふ……でも、一つだけ、旦那様がずっと私と共にあり続ける方法があるのです」

「そ、それは何でしょうか？」

得体の知れない恐怖を感じながらも、記者としての性から、私は文花帖と万年筆を手に早苗さんに詰めよりました。

「……自らの肉の器を供犠として、風祝の女の胎に宿る守矢の秘義です」

「！？」

ということは、お腹の赤ちゃんは……

「そして、生まれ落ちた子は、母体となった風祝の女同様、生まれながらにして現人神となるのです」

呆然とする私に、早苗さんはぐぐつと顔を近づけました。

「素晴らしいでしょう？　愛しい方と契り、愛しい方を産み育て、母として妻として、未来永劫ずっとずっとずっと一緒に」

その拍子に私は、早苗さんの瞳をまともに覗きこんでしまいました。

その瞳ははるか遠くを見据え、そこに私は映っていませんでした。やがて生まれるであろう旦那さんとの、背徳感に溢れる愛の風景でも夢想しているかのようでした。

その後は、いつも通りの当たり障りのない取材（馴れ初めや結婚に至るまでの経緯など）を伺い、取材を終えました。

……いやはやしかし。

今回は人間同士との事だったので、軽めのお話かと思っていたのですが、うつむ。

人間の本質と言うものを垣間見たような気がしました。

後日談となりますが、早苗さんは無事に男の赤ちゃんを出産し、

旦那さんと同じ名前を名付けたそうです。

ヤンデレ。新聞4

みなさん、こんにちは。

清く正しい幻想郷最速のブン屋、射命丸 文です。

そろそろ、私のお腹も目立ち始め、普段着では隠しきれなくなつて来ました。

まあ、別に隠す必要なんて無いんですけどね。

旦那様との愛の結晶である有精卵が、順調に育っている証なのですから。

「ふーむ……イマイチですねぇ……」

文花帖にメモを取った取材内容を確認しながら、私はひとりごちました。

早苗さんご夫妻の取材の後も、いくつかの夫婦の取材を行いました。

どのご夫婦も、伴侶に対する深く淀んだ愛情の感じられる、それは素晴らしいものでした。

しかし、なんというか、まあ……

有り体に言ってしまうと、インパクトに欠けるのです。

鳥目にしてうんぬんかんぬんやら、厄塗れにしてうんぬんかんぬんやら、精神の境界を弄つてうんぬんかんぬんやら、運命を操つてうんぬんかんぬんなんて、彼女らの能力や性格を考えれば容易に想像出来過ぎて、意外性が無さ過ぎるのです。

記事にしたところで、これを読んだ読者はきつと「そーなのかー」

程度にしか感じないと思います。

こんなことでは、はたてに勝てません。

「はてさて、どうしたものか……」

記事の内容に頭を抱えながら、私は特ダネを探して空を飛んでいました。

丁度、香霖堂の上空に差し掛かった時のことです。

信じられない光景を目の当たりにしました。

香霖堂の店主、森近 霖之助さんが、見知らぬ少女と何やら親しげにしているではありませんか。

周りに魅力的な少女が大勢いるにも関わらず、浮いた噂の一つもなく、実は男色家なのではと、まことしやかに囁かれていた彼に、いつの間にやら伴侶が居たのです。

どうやら、何処かに出掛けて帰ってきたところのようです。

「こんにちはーっ!!」

考えるよりも先に、私の記者としての本能が働きました。
挨拶すると同時に、二人の元に降り立ちます。

「霖之助さん！ そちらの方はどちら様でしょうか!？」

鼻息も荒く詰め寄る私に、霖之助さんは鼻白み、隣の彼女さんは驚いたように目を丸くしましたが、構ってはいられません。

「ああ、彼女は……」

「奥様ですね！ 分かります！」

霖之助さんの言葉を遮り、万年筆と文花帖を手に彼女さんに詰め

寄ります。

雪のように白い肌と、肩口で切りそろえた艶やかな黒髪。いかにも正統派といった感じの美少女です。

「お名前は！？ 霖之助さんとは、どういう経緯でお付き合いを！？」

鈴仙さんに似た服装（たしか、ブレザーと言いましたか）ですが、おそらく外来人でしょう。

注意深く観察してみると、お腹が少し膨らんでいます。やる事はきちんとやっているみたいです。

「あ、あ、あの、あの、わ、わた、わた、し……」

彼女は言葉をどもらせ、おろおろと私と霖之助さんを交互に見やります。

霖之助さんは苦笑交じりに嘆息し、私から護るように彼女との間に割って入りました。

「言っておくが、彼女は僕の恋人でも妻でもないよ」

白々しいにもほどがあります。

数多くの病んだ夫婦をつぶさに見つめ続けて来た私の目は誤魔化せません。

だいたい、しっかりやる事やっているくせに、何を言っていやがるのでしょうか、この鬼畜眼鏡は。

「彼女は道具さ」

「ど、ど、道具！？」

い……言つに事欠いて、じょ、女性を道具呼ばわりとは！
断じて許せません！

「何か誤解をしているようだけど、彼女は人間そっくりに作られた、
外の世界の道具なんだよ」

「……へっ？」

予想だになかった一言に、私は目が点になりました。
外の世界の道具？

この娘さんが？

思わずマジマジと見つめてしまいます。

彼女は、居心地が悪そうに、身を竦ませ、霖之助さんの背後に隠れてしまいます。

「ど、どう見ても、人間にしか見えませんが……」

「そうだろう？ 僕も見つけたときは驚いたよ」

詳しく話を伺ってみると、半年ほど前、無縁塚で流れ着く外の世界の物を物色していたところ、偶然彼女を発見し「拾った」のだそうです。

「最初の頃は暴れて大変だったよ。だけど、丹念に根気よく手入れをしたら、言う事を聞いてくれるようになった」

「手入れ、ですか？」

「ああ。道具はきちんと手入れをしないと、肝心なところで言う事を聞いてくれなくなるからね」

にこやかに微笑む霖之助さんの笑顔に、私は全身が総毛立つような悪寒を覚えました。

この感覚は、早苗さんの時に感じたものと良く似ています。

しかし、ここで逃げ出すわけにはいきません。

私は、文花帖にペンを走らせ、霖之助さんの話を遺漏なく記録していきます。

「唯一つ残念なのは、言語機能に障害が出てしまった事かな。他の機能はおおむね良好だけど、言葉を上手く喋れないんだ」

「そ、そうなんですか」

休みなくペンを走らせつつ、そっと彼女の顔を窺ってみます。

何か言いたそうに口を半開きにしては、結局何も言わずに口を噤んで俯いてしまいました。

彼女の表情は、私が取材してきた少女達の伴侶である旦那さんと同じでした。

それだけで、賢明な読者諸氏には、何を意味するのが理解できると思います。

「え、えーと、霖之助さん。か、彼女は妊娠しているようですが、道具でも妊娠するものなのでしょうか？」

「僕も驚いている。そこが外の世界の道具の凄いところさ。河童が絶賛するのも分かる気がするよ」

霖之助さんは、あくまで彼女を道具と言い張ります。

しかし、やはり、私には……

だいたい、道具と言いつ張るとなると……

あなたは、道具相手に何をしたのですか？

「疑っているのかい？」

不意に、霖之助さんが、私の顔を覗き込みました。

危うく上げそうになった悲鳴を、寸でのところで飲み込みます。

「僕的能力は知っているだろう？　その僕が、道具だと言ってるんだよ。わかるかい？」

霖之助さんの眼鏡に陽光が反射し、彼の目は良く見えませんでした。

見えなくてよかったと思っています。

「も、もちろんですとも！」

私は、やっとの思いでそう答えました。

私の答えに満足したのか、霖之助さんは、満足げに口元に笑みを浮かべました。

「それなら結構。それじゃ、失礼するよ。手入れが必要なんでね」

霖之助さんはそう言い残し、彼女の手を引いて香霖堂の中に入って行きました。

「あ！　ま、待ってください！　もう少し取材を……」

私の声は、扉の閉じる無情な音にかき消されました。

追い打ちをかけるように、がちやりと内側から鍵がかけられてしまいます。

結局、取材らしい取材は出来ませんでした。

彼女が何者だったのか。

霖之助さんの言うとおり、外の世界の道具なのか。

肝心なことは全く分からずじまいでした。

後に残ったのは、途方もない疲労感と奇妙な後味の悪さでした。

結局その日は、早々に帰宅し、口直しとばかりに旦那様を可愛が

って過ぎました。

くろんげ 1

「おはよう」

朝目が覚めたら、鈴仙の顔があった。

鈴仙が俺の布団に同衾していることはよくある事なので、俺は特に何の疑問も抱かず、おはよう、と返した。

鈴仙はそれに対してにつこりと微笑んだ。

なんだが、普段より目が赤い気がするんだが気のせいだろうか。そこで、ふと違和感に気付く。

身体が動かない。より正確に言うと、首から下が。

「波長を操って、あなたの身体の自由を奪っているわ」

俺の疑問に答えるように、鈴仙は事もなげに言った。

一体なぜだ。

「本来の目的とは違うけど、せつかく身動きが取れないのだから……」

鈴仙はブレザーの胸元を緩めながら俺に擦り寄ってきた。
吐息が俺の頬を撫でる。

「ちょっとだけ、私の中の獣を鎮めてもらおうかな……」

アーツ。

「しくしくしく……汚されちゃった……」

「人聞きの悪いことを言わないでよ」

鈴仙に「そこまでよ！」的な意味で可愛がられた後。

俺は空を飛んでいた。

別にヤバイ薬をキメているわけではない。

鈴仙の能力で身体の自由を奪われた俺は、お姫様だっこされた状態で空を飛んでいるのだ。

飛んでいる方角や見える景色から察すると、永遠亭に向かっていくようだが…

なにこの羞恥プレイ。

「なあ、鈴仙」

「なあに」

「いったい、これはどういうことなんだ」

「説明すると長くなるから、あとでね」

「いや、長くなってもいいから説明プリーズ」

「簡潔に言っと、拉致監禁プラス洗脳かしら」

あっさりと凄い事言いやがったよこの娘。

でもちよつとだけ、胸キュンしてしまった俺はもうダメなのかもしれん。

「ねえ。私のこと好き？」

「好きだよ」

「私もあなたが好き。だからいつも私だけを見てほしいの」

「見てるじゃん」

「いいえ。今のままでは不十分なの」

「だから、拉致監禁かよ、おい」

「洗脳が抜けてるわ」

「それが一番ヤバイわ」

「洗脳が完了したら、そんなことすら理解出来ないようになるんだ

から無問題よ」

「鈴仙、俺は悲しいよ。君はそういう怖い事を言う子じゃ無かったはずなのに」

「お願い、わかって。これがあなたの為なの」

「いいえ、わかりません」

俺は鈴仙の顔を見つめる。

目の焦点が合っていない気がするんだが気のせいかな。

「ところで、どうやって俺を洗脳するんだ？ 薬でも使うのか？」

「あいにく、師匠のように、精神を支配するような薬は私の知識では作れないわ」

「んじゃ、どうすんの。八意先生にお願いして作ってもらうのか？」

「いいえ。私の能力で、あなたの精神の波長を狂わせて支配するの」
「え」

「半永久的に相手の精神の波長を狂わせるなんて試みは初めてだから、成功するかどうか正直分からない」

「じゃあ、止めようぜ。無理して危ない橋を渡ることとは無いさ」

「下手をしたら、貴方の心が壊れて廃人になっちゃうかもしれない」

「よし、落ち着け」

「でも心配しないで」

鈴仙は、いかにも恋する乙女ってカンジに頬を染め、恥じらうような笑みを浮かべた。

こんな状況じゃ無かったら、思わず抱き締めていただろう。
身体動かないけど。

「そうなくても、ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとと面倒みるから」

「まてまてまてまて」

「本音を言つなら、壊れてくれた方が私にとっては好都合なんだけど……好きにできるし……」

「はは、はははは……は……」

まずい。これはまずいぞ。

永遠亭に監禁っただけでも十分死亡フラグだつてのに。

必死に打開策を練る俺の視界の端に、こちらに近づいてくる黒い影が映った。

「あやや？ これはこれは、お二方。妙なところでお会いしますね」

影の正体は幻想郷パラッチこと、射命丸 文だった。

「お二人はいつもラブラブで羨ましいですね」

「じゃ、射命丸！！ 良い所に……むぐっ！？」

助けを求めようとしたら、鈴仙に唇を塞がれた。

二人きりでなけりややらないような、そりゃあもうディープなやつをかまされた。

「んっ、んむっ、んくっ……」

呆氣にとられる射命丸を尻目に、鈴仙は俺の口内を蹂躪し、舌を絡め唾液を送り込んでくる。

ぴちゃぴちゃという水音まで聞こえてくる有様だ。

「ぷはっ……」

やがて唇が離れると、鈴仙は射命丸に向かって艶然と微笑んだ。
誰だ、お前。

「お、おお、おお。朝っぱらから恥知らずというか恥晒しというか、お盛んですね！！ さすが万年発情期の兎だけあります！！」

射命丸は興奮しながらパシャパシャとシャッターを切る。

お前、やめろ。こんなところを写真に撮るな。

「それにしても……そのお姫様だっこは、新手的羞恥プレイか何かですか？」

「ちが」

「ええ、そうよ。この人って実はこういう趣味があつたの」

「な、なんと！」

「というわけで、これから私たちは、種馬でも顔を赤らめるような羞恥プレイに及ぶので失礼するわ」

「ま、待ってください！ もうちょっと取材を！！ プレイの内容について詳しく！！」

食い下がる射命丸に、鈴仙は苛立たしげに舌打ちした。

……ほんと誰だよ、お前。

「まったく、鬱陶しいカラスね。カラスはカラスらしく、残飯でも漁っていればいいものを」

「あやややや！？ 仲間を見捨ててバックレた臆病者のチキン風情から、ものすごい暴言を頂いちゃいましたよー！？」

「チキンはあなたでしょう、鳥類」

「むむむ。それは弾幕ごっこのお誘いと受け取って良いのでしょうか？」

「なによ、やる気？」

二人とも口元に笑みを形作ってはいるが、身体から発せられる殺

気が尋常じゃない。

その気当たりだけでパンピーの俺は十分死ねる。

「ふふふふふ。私が勝ったら、その人を頂きますね」

「何ですって!？」

「実は、私も密かに狙っておりまして」

射命丸が妙に熱の籠った目で俺を見つめた。

「しかも、羞恥プレイがご趣味との事。椀の分のスペアの首輪もありますし、兎よりも素晴らしいプレイを提供できますよ!」

まで。今、さらっととんでもないことを言わなかったか。

「あなた、人の意思を無視して、何を勝手なことを言っているの?」

君がそれを言うのかね、鈴仙。

「略奪愛こそ、この幻想郷で最も美しいですよ」

会話のキャッチボールが出来ていない。

ここの連中って、何でこうなんだろう。

「いいわ。やれるもんなら、やってみなさい!」

「もちろんですとも!」

言うなり、射命丸が弾幕を張る。

俺が居ることを忘れてるだろ、お前。

鈴仙は嘲るように口の端を歪めると、物理法則を完全に無視した超絶機動で、射命丸の弾幕をことごとくグレイズし、霊弾を撃ち返

す。

しかし、相手は射命丸だ。

その程度で撃墜できるわけもなく、余裕で回避するとスペルカードを取り出した。

鈴仙も対抗するように、何かのスペルカードを取り出し――。
俺に認識出来たのはそこまでだった。

「ん、んんっ？ あれ……？」
「気がついた？」

気がつくと、相変わらず鈴仙にお姫様だっこの状態だった。
強烈なGで気を失っていたらしい。

「射命丸は……？」
「カラスならあそこよ」

鈴仙の示す方向に顔を向けると、そこには激しく動き回りながら、
虚空に向けて弾幕を展開している射命丸の姿があった。

「何をしたんだ、鈴仙」
「視覚の波長をちょっと狂わせたのよ。あの鴉天狗は自分にしか見えない私の幻影と闘ってるの。滑稽でしょう？」
「それはまた……」

「いくら、長く生きている妖怪といっても、所詮は鳥頭ね。あっさ

り引つかかってくれたわ」

憐れ射命丸。

はて。

そついえば俺、なんか重要なことを忘れていないか。

「さて、邪魔者が消えたところで……」

鈴仙の赤い目が俺の目を覗き込む。

「永遠亭に戻ってからにしようと思ったけど、先に狂わせたほうが良さそうね」

焦点の合っていない狂気の瞳に俺の背筋が粟立つ。

恐怖を感じつつも、目を逸らすことが出来ない。

自分の中にある、ほんの僅かな歓喜を自覚してしまったから。

「あー……あ……う……」

心を犯されている、というのがはっきりと理解できた。

自分の感情や、今までの知識や経験といったものがボロボロと零れ落ち、そこに鈴仙が入り込んでくる。

俺の心を形作っているあらゆるものが、鈴仙に置き換わっていく。

「可愛いわ。ゆっくりゆっくり、狂わせてあげるから……」

唇が重ねられると同時に、俺は意識を喪失した。

くろんげ2

「れーせん、れーせん」

「はいはい。私はここに居るわよ」

「うー……」

私は彼の身体を抱き締めると、背中を優しく撫でて上げた。

「あー……」

それだけで、彼は安心したように目を細めた。

途中でカラスに邪魔をされたりしたもの、私はこの人を無事狂わせる事に成功した。

目から光が失われ、感情が抜け落ち、徐々に正気を失っていく様子は、今までで最も儚く美しかった。

たった一度しか見る事の出来ない、愛しい人が私に見せた最もキレイな瞬間。

不覚にも軽く達してしまったほどだった。

時間をかけてじっくりじっくり狂わせた結果、今の彼の中には私しか存在しない。

思考も感情も全て私に対する恋慕しかない。

言葉だって、まともに話せるのは、理解できるのは私の名前くらいしかない。

濁って光を失った瞳は私しか映し出さない。

こんなに素晴らしい事があるだろうか。

「れーせん？」

「ううん、何でもないのよ」

抱き締めたまま、背中を軽くあやすようにポンポンと叩いてあげる。

こうしてあげると、彼はとても安心するのだ。

彼の一挙手一投足全てが狂おしいほどに愛しい。

やはり、狂わせて正解だった。

こうすることが、彼にとって最善だったのだ。

その証拠に、彼はとても幸せそうだった。

もちろん、私もとても幸せだ。

「少しの間我慢していてね。師匠の手伝いをしてくるから」

不安そうに私を見送る恋人の表情に後ろ髪を引かれつつ、私は自室を後にした。

部屋を出ると、物陰からてゐやイナバ達が、廊下の陰から様子を窺っている事に気が付いた。

その目には明らかな奇異の色が宿っているが、そんなものにはもう慣れた、というか、最初から気にしてはいない。

下等な地上の妖怪鬼風情の目をいちいち気にしているほど、私は暇では無い。

え？ 姫様にはどう思われているのかですって？

さあ？ あの人とは昼夜の生活が逆転しているから、半年以上も会っていないし。

WEBマネーさえ与えられていればそれで満足な引きこもりなんて、そもそも眼中にすらないわ。

「遅かったわね、ウドンゲ」

「す、すいません、師匠」

咎めるような師匠こと八意 永琳に、私は申し訳なさそうに頭を下げた。

所詮、適当に師匠だなんだと持ち上げていれば、それで満足して
いられる安い女だ。

内心の想いを押し隠し、せいぜい従順に従って見せる。

「貴方が恋人にした事だけど……」

暫くの間、指示された作業を続けていると、師匠はぼつりとつぶ
やくように言った。

「最初はちよつと度が過ぎていると思ったわ」

「は、はい」

「だけど、彼がああなつてからの貴方の働きぶりは目覚ましいわ」

「あ、ありがとうございます」

だから、不問に処す、とでも言いたいのだろうか。

本当につまらない女。

億単位の歳月を生きてきたくせに、こんな愚にもつかない実験を
していればそれで満足だなんて。

それはともかく、今まで失敗が多かったのは当然だ。

月から匿ってもらつたための、お義理で手伝いをしていただけなの
だから。

好きでもない事を義理でやっているのだから、片手落ちになるの
は当たり前のことだ。

だけど、今は違う。

仕事を早く終わらせれば、それだけ多くの時間を愛しい人と過ご
せるのだ。

それに、明確な目的だつてある。

それは彼を妖怪化するための薬を作り上げるといふものだ。

人間であるあの人は、このままでは確実に私より先に老いて死ん
でしまうからだ。

「……あつ」

「どうかしたの、ウドンゲ？」

「いつ、いえ。何でもありません」

……そうよ。そうよね。

別に、製薬にこだわる必要なんて無いじゃない。

師匠は私に背を向けている。

たしか、蓬萊人の生き胆って。

師匠は実験に集中している。

ねえ、師匠。いいですよ？

どうせ、死なないんだし。

私と彼の幸せのためですもの。

弟子のために一肌脱ぐのも師の務めですよ？

私は、音を立てずに師匠の背後に立つと、手に持ったソレを
大きく振りかぶって
大

ヤンデレ。新聞5

みなさん、こんにちは。

清く正しい幻想郷最速のブン屋、射命丸 文です。

いよいよ、冬の寒さも本格的になってきました。

読者のみなさんは、そんな寒さなどものともしない勢いで、伴侶とイチヤネチヨしていらつしゃるかと思いますが、体調管理と火の元には十分お気を付け下さい。

さて、いくつかの夫婦の取材を紹介しましたが、いかがだったでしょうか？

皆さんの伴侶に対する、奈落のように深い愛情の一端でも感じていただければ幸いです。

最後は、この私、射命丸 文と旦那様のお話で締めさせていただきます。どうかと思います。

「ただいまー」

「おかえりなさい、文」

連日の取材を終え私が帰宅すると、旦那様が満面の笑みで出迎えてくれます。

「御飯もお風呂も準備できてるよ」

本当に、良く出来た、自慢の旦那様です。

まあ、私がそういうふうに育てたのですが。

「ありがとう。んっ……」

身を屈め、私より頭一つ分背の低い旦那様に、ご褒美のキスをし

て差し上げます。

すると、旦那様は熟した柿のように真っ赤になってしまいました。もう行くところまで行きついているというのに、初心な旦那様です。

まあ、それもむべなるかな、旦那様はまだ12歳の少年なのですから。

取材続きで、色々なものが溜まりに溜まっていた私は、旦那様の可愛らしい反応に堪らなくなり、その場に押し倒してしまいました。

「あ、文！？　だ、駄目だよ、御飯が冷めちゃ……あっ！」

「も、もう……酷いよ、文……」

「あやや。ごめんなさい。でも、そんなに可愛らしい旦那様が悪いのよ？」

「意味が分からないよ……」

しゃくりを上げながら、散らばった衣服で身体を隠す旦那様を視姦つつ、旦那様の用意してくれた晩御飯に下鼓を打ちます。

「お腹に障ったらどうするの」

「それなら、心配無用よ。もう安定期に入っているから」

「そういう問題じゃないよ……」

旦那様は、可愛らしく頬を膨らませました。

私が旦那様を娶ったのは、今から5年ほど前の事になります。

その頃、ちょうど私の元部下の椛が、突然の出来婚で退職してしまい、当時の私はかなり動揺していました。

何しろ、あの朴念仁を絵に書いて立体化したような椛に先を越されたのですから。

そんな時、人里に住み着いた少年の噂を耳にしました。

それが、旦那様でした。

その頃は、まだ7歳の本当に年端もいかない少年でした。

外の世界で家族旅行をしていた時に事故に会い、運良く生き残った旦那様だけが幻想郷に迷い込んだらしいのです。

空き家を与えられ、慧音さんの指示で人里の人間達が面倒を見ていたようですが、事故のショックからか、全く他人に心を許さず、怯えたように家に閉じこもっているだけで、里の人間達も扱いに困っていたようです。

しかし、里の守護者である慧音さんの指示なのですから、放り出すわけにもいきません。

言ってしまうえば、厄介者扱いされていたわけです。

噂を聞いた私は、随分と可愛げのない子供なのだろうと思い、興味半分で様子を見に行ってみました。新聞のネタにできるかもしれないという期待もありました。

格子窓越しに部屋の中を覗き込んで見たところ、栄養失調気味でやせ細っており、身なりも随分と汚らしいものでしたが、なかなかどうして、私好みの可愛らしい子でした。

部屋の隅に小動物のように蹲り、怯えたように頻りに爪を噛んでいる姿なんて堪りませんでした。

気がついた時、私は旦那様を攫っていました。

そして、恐怖と不安で泣き叫んで暴れる旦那様を強引に……というわけです。

これまで体験した事の無い未知の感覚に、流され翻弄され、戸惑いの中にも、徐々に恍惚を見出して堕ちて行く様子は、中々そそりました。

人間は、物質的な感覚に依存する生き物です。身体を屈伏させてしまえば、心を陥落させることなど容易なことでした。身体も精神も未熟な子供であれば尚更の事です。

かくして、素直で従順な、素敵な旦那様に仕上がったというわけ
です。

この辺りの詳細をお知りになりたい方は、裏・文々。新聞の購読
をお勧めいたします。

射命丸式旦那様育成方法の詳細をご覧になる事が出来ます。

あ、もちろん、18歳未満のお子様はいけませんよ？

慧音先生の副業

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

幻想郷に迷い込んだと思ったら、いつの間にか妻帯者になっていた。

な…何を言っているのか、わからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ……

「……どうしたんですか？」

「えっ！？ ああ、いや。なんでもないよ、桜さん」

「ふふふ……もう結婚して1年ですよ？ いまさら、そんな他人行儀な呼び方して……」

どうやら、俺と桜さんは、結婚して1年が経過しているらしい。

結婚した記憶はおろか、今までの結婚生活も全く思い出せないのだが。

「もう！ しっかりしてくださいな。もうすぐお父さんになるんですよ？」

おうふ。

何てことだ。

まさか、マーク？のロールアウトまで控えているなんて。

「旦那様……」

痛みすら感じるほどにきつく、桜さんの手が俺の腕を掴んだ。

そして、大きく膨らんだ彼女のお腹に手を当てさせられる。

「これからも、ずっとずっとずっと末長く、宜しく願いますね」

獣のような瞳で射すくめられた俺に出来るのは、従順に頷く事だけでした……

「慧音の寺小屋、随分と立派になったんだね」

「ふふ、まあな」

「生徒の親から貰う学費だけで、よくこんなに拡張できたね」

「ああ、その事か。ちよつとした副業を始めたんだが、思いのほか好調だな」

「へえ？ 副業ってどんな？」

「ふふ、いずれ分かるよ。ところで、妹紅。お前に意中の殿方は居ないか？ 相談に乗ってやれるかもしれないぞ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845o/>

東方の短編とか B面

2011年10月11日11時04分発行